

少年詩にあらわれたシエリー

きみとぼくと、そして

P・B・シエリー

オグデン・ナツシユ

石原 武 訳

人生とは、なに？ 階段を下りていくことか、それとも、椅子に坐っていること、いや違うな。

床にワックスを塗り終ったという男の報告などでもない。

Push のマークの扉ドアをひっぱり、

Pull の扉ドアを押すことだ。他の

ドアから入って下さい という貼紙などに目もくれずに。

人生とは復活祭のパレードだ。

その最中に、きみは、見知らぬ人の耳に、こんなことを囁いて、驚かしたりする。 ねえ、男の子だったら、きみのお父さんの名前をつけようね。

だって傍を並んで歩いているはずの女が、いつの間にか、足を止めてウインドの野菜や、ホット・レモネードなど覗き込んでいるんだもの。

地理の授業の準備はしていないし、のど

喉は痛いしと、泣く子の喉を、きみは覗いて、大丈夫と学校に行かせる  
と、一時間もたないうちに、正真正銘の発疹が体中であらわれて、きみの子は学校から帰される 人生とはそんな時だ。

ユーディ・メーニューヒンの代役のトロンボン奏者のコンサート、それも人生だ。

欲求不満とか屈辱とかがなかったら、人類は今よりずっとましの考えを思いつくかもしれないな。

ある人がかつて、シエリーは美しくも無力な天使だ、その発光する翼を虚空にただばたつかせている、と云ったことがある。

思い切ったいい方だね。

でも、多分、ぼくたちは自分の皮をかぶっているけれど、その下はみんな同じような仲間だといいたいのだろう。

シエリーは Push の扉をひっぱり、

Pull の扉を押して、歩き廻って  
いたんだな。

誰だってそうだけれど。

詩集『カスタードと仲間たち』  
(パフィン・ブックス)